

博士学位論文要約

野村芳兵衛の教育思想—往相・還相としての「生命信順」と「仲間作り」—

2021（令和3）年3月

奈良女子大学大学院人間文化総合科学研究科

博士後期課程生活環境学専攻

富澤 美千子

本論文は、東京・池袋児童の村小学校（1924年-1936年）で訓導・主事を務め、大正新教育の代表的実践家として活躍した人物である野村芳兵衛（1896年-1986年）の教育思想を対象に、その生涯にわたる一貫した持続的な教育思想の生成を明らかにして、日本の近現代人間形成思想の発展に多大な貢献を果たした彼の独自性と、独創的な教育実践システムへの教育思想の体系的・創造的な具現化を探究したものである。そのさい、野村の教育思想の全体を貫く基軸となるキーコンセプトを、「生命信順」と「仲間作り」の教育と捉えた。すなわち、1920年代半ば、野村の教育思想形成の初期段階において、葛藤と苦悩を乗り越えて見出した「生命信順」の教育、またその展開としての「教育意識なき教育」と「協力意志に立つ教育」、さらに1930年代に入ってから「協働自治」の教育、そして戦後における「仲間作り」の教育が、表現を変えながらも首尾一貫して持続的に教育思想を生成・発展させるものであったこと、そして教育実践家として具現化し、体系化されたものであったことを解明していった。

従来の野村に関する先行研究に見られる限界は、研究対象が、彼の思想や実践の一部分・一断面を叙述することにとどまってきた点にある。そこでは、本論文が対象とする、野村の教育思想の通時的な生成と発展については、研究問題として設定されていない。その中で、野村の教育思想それ自体の体系的な解明に大きな足跡を残したのが、中内敏夫の研究である。それは、野村の教育思想の生成・発展の中に、1930年代に入ってから「神学から人間学への転回」、すなわち大正期の「生命信順」の教育から昭和期の「協働自治」の教育への断絶と転回を見出すものである。しかし、本論文は、「生命信順」の教育を「神学」、すなわち超越神＝絶対者信仰としてカテゴリー化するのではなく、その思想的基盤と論理構造を新たに分析することによって、「生命信順」の教育は、「協働自治」の教育において放棄・断絶されたのではなく実践的に具現化されたのであり、戦後に「仲間作り」のカテゴリーへと一貫して持続的に生成・発展していったものであることを明らかにしている。

野村の言う「生命信順」、すなわち「自分の生活の全的な救いを祈念する心」は、「教育意識」の「不純性」、つまりは教師と子どもの間の支配と被支配の関係からの解放という自己救済の願求から、「教育意識なき教育」と「協力意志に立つ教育」に野村を向かわせたもの

である。たしかに野村は、「生命信順」を「宗教的動機」に根ざすものとしている。しかし、それは神学的な超越神信仰ではなく、自己の倫理的な在り方を探究する思想の営みを指すものである。こうした「生命信順」の核心にあるものは、野村が親鸞の思想から摂取した「他力回向」の論理である。「他力回向」とは、有限の存在である自己が、「他力」すなわち無限の営みに身を委ねることにより、無限の力に包摂され、その一体化がもたらす「回向」を通して自己を救済し、他者支配の自我の欲望から離れ、同時に他者との応答・配慮の新しい関係を組み直し、他者をも救済する、という自他の相即的・同時的な救済の論理である。野村の教育思想の独自性は、「教育意識」という支配の教育を超え、それからの解放をめざす「協力意志に立つ教育」の可能性を、「他力回向」の論理に基づく還相としての「生命信順」の教育、そしてその実践的具現化としての往相として「協働自治」の教育、戦後におけるその展開としての「仲間作り」の教育として切り開いたことにある。こうして本論文の第一の達成は、野村教育思想の独自性を、先行研究において分析枠組みとして見落とされ用いられてこなかった「他力回向」の論理の点から新たに解明し、野村教育思想の核心である「他力」の教育として、葛藤・苦悩により気づいた「生命信順」の教育思想を基底に「仲間作り」の教育を提示した点にある。

本論文の第二の達成は、野村が「仲間作り」の生活創造として教育の本質を捉える思想を教育実践の現場でいかに具現化していったのかを体系的に分析・検討し、野村における教育思想と教育実践の相互作用的・往還的な創造を明らかにしたことにある。そこでは、野村の「仲間作り」の教育思想の体系的な具現化として生み出された「野天学校」「親交学校」「学習学校」の三位一体的教育構想にもとづく教育実践を取り上げ、それぞれにおける野村の子ども観や野村の考える教師の役割、カリキュラムの構想、実践事例の詳細な分析を重ね、「仲間作り」の教育の具体像を明確にした。それにより本論文は、野村の相即的な往相・還相としての「協力意志に立つ教育」の思想を解明することとなった。